

きょうだい間対立が起こる世界の外側

—研究生生活を終えるにあたり—

神戸女学院大学大学院 人間科学研究科 研究生 今崎 惟

動物行動学という分野を研究するようになりしばらく経ったが、おおよそこの10年の間にも動物の行動や知能に対する世間の認識はかなり変わってきたように思う。ひとつには、SNSなどの媒体においてペットや野生動物の行動を映した動画等の流布が普遍的となり、学術研究のような試みだけでは必ずしも得ることのできない偶然の『観察例』が一般的に共有されることが劇的に増えたことが遠因であるような気がしてならない。少し前であれば、シートン動物記における動物の感情にまつわる逸話が奇談の類として解釈されていたほか、霊長類以外の動物の知能や感情を扱うことは擬人化であるなどとして敬遠される風潮があった。しかし、そのような研究外の観察も数が集まると『データ』となり、科学的な見方がなされ得る。そのような社会的背景があったためか否か、最近では動物のコミュニケーションや言語に関する研究にスポットライトが当たるようになってきた。

最近、SNS上において、アヒルの母親が無関係の雛の一群を自分の養い子として躊躇無く引き入れる様子を映した動画を偶然目にする機会があった。一般的な反応としては母アヒルの懐の広さに感嘆するというものかもしれないが、個人的な所感としては、アヒルのように親子ともに散策しながら採餌を行う種においては無関係な雛を養うことのコストは子への給餌に労力をかける種においてよりもはるかに軽いものであったのか、という一種のひらめきであった。

私がこれまで取り組んできたテーマである「きょうだい間共食い」あるいは「きょうだい殺し」という行動は、長い間、主に鳥類において

研究されてきた（※きょうだい：兄弟姉妹を統一して本表記としている）。きょうだい間での攻撃的相互作用は、例えば多くの鳥類が造る巣のような、外界と隔絶された独立ユニット内で雛たちが親の給餌に完全に依存する種において特に純粋な形で観察できるものとされ、特に鳥類において恰好の研究対象であった。同時期に生まれたきょうだいの一群は『ブルード (Brood)』と呼ばれ、餌資源など親の投資をめぐってきょうだい同士が激しく競争する場合、子の死亡に繋がり、最終的にブルードを構成する子の数が減少する『ブルード減少』に帰結することは珍しいことではない。

しかし他方では、例えば、有名な所ではアヒルやカルガモに代表されるカモ目やニワトリのような家禽類の子育てにおいては、採餌・摂食それ自体は雛が各自で行うのみである。母親はブルードへの給餌に労力を割く必要はなく、ただブルードを連れて周辺環境中を散策し、保護行動のほか採餌に関する各種鳴き声を発するなどのコミュニケーションを図るだけで十分である。つまりブルード内の雛の間には親から与えられる餌資源を巡る競争は無きに等しく、そのためこのような子の養育の形態をもつ種のブルードにおいては攻撃行動を伴う直接的なきょうだい間競争はまずみられない。

複数の子が同時に育つブルードを形成する形式をとる種は、鳥類のほか哺乳類や昆虫など様々な分類群で散見されるが、ブルードの移動能力が高く子自らが親に付き従って採餌活動が可能で、可能な種のそのような子育て様式は非常に効率が良い印象を受ける。しかし、そのようなきよ

うだい間競争の側面では非常に平和的と言える様式がどのように進化してきたのかという問題に関しては、疑問の余地もなく、その様式がごく当たり前なものとして看過されているように感じられる。実際に調査や研究をすれば、起こらないものをいくら観察しても答えは得られなさそうにも思えるが、一般的にはあまり知られていない種においてや特殊な環境下においては一概にそうとも限らないかもしれない。

これまでは、ブルード減少やきょうだい間共食いの観察や生起条件に着目し研究を行ってきたが、むしろそれらのきょうだい間における攻撃的相互作用が『起こらない』方向へ進化を遂げた種に目を向ける機会をもつことで、そのような行動の進化生態学的なプロセスに関して新たな切り口や知見を得られるのかもしれない。将来的な研究の道筋はいささか不確かとしか言えない身ではあるが、学位取得からのさらなる研究の可能性に思いを馳せ、ひとまずこの研究生活を終わらせようと思う。